

木村 大樹 提出 学位申請論文

『古代天皇祭祀の研究』 審査要旨

論文の内容の要旨

本学位申請論文は、古代の大嘗祭・新嘗・神今食など、天皇祭祀における神饌供進儀の次第・作法と、その祭祀構造、周辺諸祭儀との関連について考察し、古代神祇祭祀における天皇親祭祭祀の性格を明らかにしたものである。

第一部の「神饌供進儀の研究」では四章、第二部の「天皇祭祀の周辺」では五章と補論・附論の、あわせて八編を収め、最後に附録として、史料翻刻二編を収録する。

第一部「神饌供進儀の研究」では、天皇祭祀の中核である天皇による神饌供進儀について、祭神、神饌供進次第と作法、神饌、そして秘儀の継承という方面から論じられている。

第一章「天皇祭祀の祭神」では、大嘗祭祭神論の諸説を紹介・分析し、天皇祭祀の祭神について天照大神であること、皇祖・祖神祭祀が第一義であることを明確にした。

第二章「神今食の神饌供進儀と本義」では、九条家本『神今食次第』（宮内庁書陵部蔵）所引の『内裏式』『清涼御記』両逸文の比較をもとに、神饌供進儀の次第・作法について考察する。その上で、天皇祭祀の本義に関する先行研究の論争を整理し、寢座秘儀説は成り立たず、天皇はあくまで神饌供進の親供作法に専念していたことを再確認している。

第三章「大嘗祭の神饌」では、大嘗祭神饌の構成・調達過程などについて、形式的な面から考察を行い、鎌倉期の史料にみられる大嘗祭神饌の構成が『延喜式』段階まで遡りうること、大嘗祭は悠紀・主基の斎国が中心的に関与していたのに対して、神今食・新嘗祭では神祇官が多分に関与・介在していたことを論証する。

第四章「神饌供進儀における「秘事」の継承」では、神饌供進の作法という

「秘儀」が、歴代天皇の間でいかに継承されてきたのか、院政期以降の史料をもとに考察する。その中で、神饌供進作法の確立やテキスト化の画期に院政初期の白河上皇の存在が大きく関与していたこと、習礼を構成する要員として上皇の存在が重要であったことを明らかにする。

第二部「天皇祭祀の周辺」では、天皇親祭の周辺において、祭祀を支えた人々の供奉、前後の付属祭祀による祭儀体系、また天皇以外の祭祀・行事が、どのような構造で行われたのかを考察し、その前半では天皇祭祀の祭儀体系と御体御卜との関係、後半では天皇祭祀と中宮・東宮・斎王の祭祀との関係について考察をすすめている。

第一章「天皇親祭をとりまく人々」では、神今食・新嘗祭に供奉した「小斎人」の構造について、卜定方法や供奉の関与度合いに差異がみられることを考察しており、その差異は、天皇の次第・動きと連動し、中和院内における参入可能区域の違いとして、空間的・視覚的に表出していることを明らかにする。

第二章「神今食の祭儀体系への一試論」では、神今食の前後の諸祭儀からな

る祭儀体系について考察し、御体御卜が天皇の祭祀適合性を予備的に判断したとする先行研究について、疑義を呈した見解を表明する。

第三章「御体御卜の成立と変遷」では、第二章で扱った御体御卜について、さらに深めた考察がある。御体御卜は、七世紀後半の数代の天皇が相次いで神の祟りにより崩御したと類推されることから、持統天皇朝頃に神祟りを周期的に予見する祭儀として成立したと論じる。さらに第二章を受けて、御体御卜は神今食の付属祭儀ではなく、天皇の身体を介した天下全体の平安を見通す大規模な理念を持った祭儀であったことを論じている。

第四章「天皇と齋王の祭祀構造」では、天皇祭祀に関連して行われた伊勢斎王祭祀、及び天皇祭祀への中宮・東宮の関与について考察する。その分析として、神祇官に所属した「戸座」という存在に焦点を当て、戸座の付属する中宮は天皇祭祀を何らかの形で補助し、齋王は自ら伊勢において天皇祭祀を補完する齋王新嘗祭を行ったと考えられること。また、戸座が付属しないと考えられる東宮には神今食・新嘗祭への関与、及び東宮独自の神今食・新嘗祭がなかったで

あろうことを考察する。

第四章には、その結論を補強する附論として「『延喜式』にみる聖体安穩祭祀」を付し、天皇・中宮・東宮・斎王の身体（聖体）に対して行われた聖体安穩祭祀について考察する。すなわち、宮主・御巫・戸座といった祭祀の主体が、いずれの聖体に付属したのか、また各祭祀がどの聖体を対象として行われたのかについて、詳細な検討をすすめている。

第五章「大嘗祭の場と天皇祭祀の構造」では、天皇祭祀の場の問題から、大嘗祭と神今食・新嘗祭の比較を行い、大嘗祭が一代に一度、天照大神に「衣食住」を新調して丁重に遥拝する性格に重点が置かれた一方、神今食・新嘗祭は恒常の祭祀施設である神嘉殿において毎年定期的に神饌を供える性格が重視されていたことを明らかにした。また、このような天皇祭祀の場を大内裏の中心軸上に配置する構想が平安京造営時に遡る可能性を提示している。後半では、本論各章で考察してきたことを踏まえ、神今食と新嘗祭、および大嘗祭と新嘗祭の性格の違いを総括している。

なお第二部では、本論のサブテーマとして設けている「古代祭祀・儀式の復元的考察」に関する論考二編を第三章と第五章の補論として付し、前者では御体御卜奏上儀、後者では祈年祭の班幣行事について、図やイラストを用いて視覚的な理解ができるよう考察している。

結語では、本論では中心的に扱うことのできなかつた天皇祭祀と国家祭祀との二重構造の問題について、今後の研究における展望を踏まえて論じている。

最後の巻末には、天皇祭祀に関する貴重史料である、宮内庁書陵部蔵の『神今食次第』と『大嘗会次第』（いずれも九条家旧蔵史料）について、解説と翻刻が付されている。

論文審査の結果の要旨

大嘗祭研究について、三十年前の平成大嘗祭においては、過熱した論争が繰り広げられたが、令和の大嘗祭に際しては、落ち着いた環境のなかで地道な研

究がすすめられてきた。とくに昭和から平成にかけての時代と比べると、宮内庁書陵部・東山御文庫所蔵の大嘗祭記録の公開が格段に進展したことがあげられる。平成後半から令和にかけて、この分野の研究において、数多くの論考を發表し、大嘗祭を中心とした古代天皇祭祀の研究を牽引してきた一人が学位申請者である。

本論文の特質は、大嘗祭とその周辺の年中の天皇親祭祭祀である神今食・新嘗とを、古代の、おもに平安時代の詳細な祭式次第書を用いて、祭祀・祭式・作法の所作を分析し、その作法の仕様・あり方を丹念に考察することにより、神饌供進儀の実態を明確に浮かび上がらせたことである。「第一部 神饌供進儀の研究」の四章の論考における実証的成果は、今後の天皇祭祀研究の基礎に位置づけられたといえよう。

本論文においては、これまで研究方法として確立していなかった祭祀・祭式の所作を可視化することに成功したことがあげられる。まさに「祭祀の研究」の到達点が目指されている。それは、第二部「補論 御体御卜儀の復元的考察」

「班幣行事の復元的考察」において、儀式所作の復元と「御体御卜」の映像化に取り組まれ、可視化が現実のものになったことである。こうした方法は、祭儀の意味を明確にできる新たな方法論として重視されるべきであり、その真摯な取り組みと気概を高く評価するものである。

このほか、本論文では、随所に新たな研究の指針・萌芽を読み取ることができ。六月・十二月恒例の神今食の祭儀体系について考察し、その前段で行われる御体御卜について、従来定説化してきた天皇御体の御卜が祭祀適合性の有無を判定したとみる先行研究に疑義・批判を表明していること、神今食の祭祀は、聖体安穩を祈る祖先祭祀の性格が強いことを明らかにするなど、大嘗祭に限らず天皇親祭祭祀に関して、問題点を提起していることは、今後の研究の広がりが期待できる。

中世への祭式・作法の新たな展開を予測できる論点として、令和の大嘗祭に向けて発表した、第一部第四章「神饌供進儀における「秘事」の継承」があげられる。神饌供進作法の確立と継承において院政期白河上皇の関与が、のちの

ち影響を与えていることを予見していることは、その時代性など、さらなる研究が期待できる。

さらに、第二部第四章「天皇と齋王の祭祀構造」では、天皇祭祀に関連して、伊勢斎王と中宮・東宮関与の祭祀、その補論として、天皇・中宮・東宮・齋王の身体（聖体）に対して行われた聖体安穩祭祀についての考察は、宮主・御巫・戸座ら、天皇祭祀と深い関係性をもつ祭祀者の考察に深められており、この論議はつぎへの展開が期待できる。また、最後の「結語 古代天皇祭祀の構造理解への展望」は今後に向けた研究姿勢として、天皇祭祀研究を核にして、国家祭祀・氏族祭祀など、祭祀の重層性に強い関心が寄せられている。

巻末に収録されている宮内庁書陵部蔵『神今食次第』『大嘗会次第』二書の解説と全文翻刻は、基本史料を重視してきた本論文の立場がよく表明されている。本論文は、古代にはじまり近現代へ至る、国家祭祀・天皇祭祀・神社祭祀など、神道史・神社史研究の骨組みの部分について、根源に迫った内容であり、その基本的祭祀の性格は、常に循環する体系にあり、祭祀の原初のカタチを解き明

かした業績は高く評価できる。

以上の理由から、本論文提出者木村大樹は、博士（神道学）の学位を授与されるべき資格があるものと認められる。

令和二年十二月十四日

主 査 國學院大學大学院客員教授 岡 田 莊 司 ①

副 査 國 學 院 大 學 教 授 笹 生 衛 ①

副 査 國 學 院 大 學 准 教 授 小 林 宣 彦 ①

木村 大樹 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試問を行った結果、博士（神道学）の学位を授与される学力があることを確認した。

令和二年十二月十四日

学力確認担当者

主査	國學院大學大学院客員教授	岡田 莊司	印
副査	國學院大學教授	笹生 衛	印
副査	國學院大學准教授	小林 宣彦	印